

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

神の民 ——マルコ伝第9章33～37節——

1965年1月31日

小池辰雄

「何を論じていたか」 幕屋構造 絶対者との結びつき エホバの僕 クリストチャンの自由 別
 な途 無者中の無者 翻りて幼児の如く 十字架の棄身 十字架と聖靈 フレンドシップ 御
 靈の権威 神の民 使徒的な質の信仰

【マルコ9・33～37】

³³斯^{かく}てカペナウムに到る。イエス家に入りて、弟子たちに問い合わせる『なんじら途すがら何を論ぜしか』³⁴弟子たち黙念たり、これは途すがら、誰か大いならんと、互に争いたるに因る。³⁵イエス坐して、十二弟子を呼び、之に言いたもう『人もし頭たらんと思わば、凡^{すべ}ての人の後となり、凡ての人の役者^{えきしゃ}となるべし』

³⁶斯^{かく}てイエス幼児^{おさなご}をとりて、彼らの中におき、之を抱きて言い給う、³⁷『およそ我が名のために斯^{かか}る幼児の一人を受くる者は、我を受くるなり。我を受くる者は、我を受くるにあらず、我を遣^{つかわ}しし者を受くるなり』

●「何を論じていたか」

マルコ伝9章33～37節の並行記事はマタイ伝18章1～5節、ルカ伝9章46～48節です。マルコ伝が一番詳しく出ています。ガリラヤ湖の東の方から西の方へと移つて来られ、やがて南下されるわけです。カペナウム——「カペルナウム」とも言いますが——これはイエスがシナゴーグで語られたその礼拝堂の跡が今も残つていまして、残骸ですけれども、非常に印象深い所です。

「イエス家に入りて、弟子たちに問い合わせる『お前たちは途すがら何を論じていたか』弟子たち黙念たり」

と。ヨハネ伝の始めの方にも出ていますが、イエスは大体、人が何を思っているか、何を論じているか、そういうことは見通しのきく方です。それは一点の曇りもない心ですから、明鏡の如くに映るわけです。

「弟子たちは黙念たり」

というので、



「これはどうもまずかつた」ということをうすうす感じたとみえます。

「何を論じていたか」

という問そのものに、もう既に権威がありますので、弟子たちは既に見抜かれたことを知つたのだろうと思います。神の前に私心ある行動、またそういういた事態を自分で展開しているときには、必ずそこに、心の中に或る種の波をもつてゐる。そういうことは、人間の心というものがいかに本来、神になければ安んぜられないものであるか。アウグステイヌスの言葉にあるとおり、

「汝のうちに休らうまでは安きを得ず」

という。その「汝のうちに休らう」ということは、心がそのように神の心に化せられるとのこと。神を離れているときには、人間はどうしても自己中心になりますので、それがもう既に罪の最初の姿です。

「これは途すがら、誰が一体、大きな者であるかと、互に争ひたるに因る」

これはマタイ伝では、

「そのとき弟子たち、イエスに來りて言う『しからば天国にて大なるは誰か』」

(マタイ18・1)

なんていう、そういう問をしているように書いてあります。天国における大小、地位の高低、そういうことを問題にしている。

「天国でどつちが上だの下だの」

と。あいかわらず、キリストの福音が受けとられていないわけです。

「御意の天になるごとく、地にもならせたまえ」

という。何も天国に限らない。この地上が既に天国的であることを、神もキリストも欲しておられるわけです。

「平和、平和」

と言つていますが、コイノニアとか、

「もつと交わりを持たなくてはいかん」

とか。個人であろうと、いろいろなグループであろうと、社会的な都市であろうと、あるいは国際的な国家であろうと、もし、この関係を切ると、人間というものはとかく、Aの人とBとCを比較したくなる。

●幕屋構造

人格というものは比較をしてはいかん。それが私の幕屋構造の根本の原理です。神・キリストと各個人とを結ぶ線を切つてしまつたならばダメです。個人も、また社会も、国際関係もみな同じことです。この中を平和にしようとして、一生懸命で

「平和、平和」

と言つていますが、コイノニアとか、

「もつと交わりを持たなくてはいかん」

とか。個人であろうと、いろいろなグループであろうと、社会的な都市であろうと、ある



「あつちがどうだ、こつちがどうだ」

と、品定めみたいなことをする。これは即ち、人間を本当に人として取り扱っていない。本当の人格というものの意味を知らないわけです。ところが、

「人格だ、人間尊重だ」

とか、いろいろ言われているわけです。「人間尊重」というスローガンがだいぶ問題になっている。神との関係を手離しにして、人間尊重なんていくら言つてみたところで、これは本当の尊重にならない。それ自身が絶対化されますから。自分というものを手離しにして絶対化していく。そういうた、自己を絶対化して、人を品定めするような角度になるのが即ち、自己義認です。これが「パリサイ根性」という。

一人ひとりは神さまにつくられた、みな特殊者です。特殊的存在であります、決して、AとBとCは同じでない。世界中に何億人いようが、みな一人ひとりは特殊である。どんなに顔が似ていても、人間の顔は違う。そのように本質が、神さまにみな違つたものにくられている。あの三十三間堂の仏像がみな顔が違つたように出来ているというはなしです。それは神につくられた、創造されたところの個というものが、個体というものが、個人といふものは、

「人、全世界を得るとも、己が生命を失わば、何の益あらん」

という、全世界とも比較することのできない一人ひとりです。キリストはそのように、神において一個というものを尊重される。人間尊重とは、神においてでなければ出てこないことです。それ自体を手離しに人間尊重なんて言つたってダメです。

一人ひとりが神さまにのっぴきならない存在としてつくられている。いろいろな器につけられている。ですので、これは比較を絶した世界です。BのBらしさを、CのCらしさをAは見なくてはいかん。同様く、BはAとCを、同様くCはAとBを、見なくてはいかん。それが即ち本当に人格を尊重するということです。

人間を尊重するということは、神につくられた者の、即ち、CはCらしき栄光を、神の栄光をここにおいて現す。そのようにつくられた一人ひとりの栄光が現されていく。そのためには絶対に上からの流れ、光、力、愛、生命、これを受けていく。一人ひとりはみな光彩が違うわけです。光が違うわけです。虹は七色というけれども、あれは無限色です。無限色をもつてゐる。姿も形も、百花繚乱にもうもろの花があるのと同じように、人間もまたそのようにある。

であるので、比較ができない。誰が大きいの小さいのなんて、そういうことを品定めすこと自体が既にもうまちがいです。間が間違つてゐる。間そのものが間違いである。しかし、人間というものはどうも、そういうことをやつてみたくなる。

「あの人は偉いの偉くないの、どうのこうの」

と。神さまは器をいろいろな意味に、大きくも小さくも、いろんな具合にお造りになつて



いる。だから、人生の意味というものは、自分がつくられ創造された、その一番の神さまの特殊性、本質というものをよく自覚して、それを本当に神の力でのばしていくことがで

きる。

そういう考えが日本人の中にはないから、職業問題でもつて本当の天職意識をもたない。教育の問題も結局、ここから来るわけです。何でもかんでもみんな大学生になろうなんて思つてはいる。結局、その社会的な地位をどうのこうのと考えている。いつまでたつても始まらない。もう日本は絶対に本当の宗教心を持たなくては。一人ひとりが本当に宗教的な人間にならなくては。どの宗教とは言いません。けれども、本当に私の無い、私心の無い世界が本当の宗教の世界ですから。日本人が一番今、自覚しなければならないことは宗教の問題なんです。

● 絶対者との結びつき

申し上げているとおり、「宗教（レリギオン）」という字は「結び付き」という言葉である。神さま、絶対者との結びつき。それを

「仏」

と言おうが、

「宇宙の大靈」

と言おうが、何と言おうがいいですよ。けれども、私たちにおいては、イエス・キリストにおいて現れ給うたところの、この創造の神です。聖書によつて証しされているところのこの事態は一切の他の真理を、また他の宗教をも包摶してしまうような驚くべき内容をもつてはいる。仏教がいくら素晴らしいあります、なおそれをも包摶することができる。事実、私たちは聖靈の光で仏教の經典をかいまみて、読めるんだから仕方がない。仏教には十字架がないから、パッと切つてしまつて、

「キリスト教でなければ」

なんて、そんなケチくさい狭いものは福音ではない。福音というものは本当に、

「凡そ真なること、凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しきこと、凡そ潔よきこと、凡そ愛すべきこと、凡そ令聞あること、如何なる徳、いかなる誓にても汝等これを念え」（ピリピ4・8）

とパウロが言つているとおり。偽りでないものは、罪でないものは全部これを受ける。また、偽りは真に変えてしまうし、罪はまた聖きに変えてしまう。変質変貌させるような驚くべき力をもつてはいる。だからもう、

「行くとしてかなわざるなし」

なんです、本当に福音というものは。

「私の信仰は……、無教会主義は……」



なんて言つて、主義を主張しているようなことではダメです。

そういう素晴らしい、神さまの一切を包摶なさるところの福音です。そして、その中に一人ひとりが、またいろいろな山川草木のいろんな存在が、詩篇19篇にあるとおり、すべて神の栄光として造られてある。宇宙は神の大庭みたいなものですね。そういう雄大な構造ですので、

「天国にて誰が大いなるか」

なんて、お互の間でどつちが上だの下だのと、もうその間自身が既に墮落であり、大間違いである。キリストは

「情けないやつらだ」

と、お思いになつたでしょう。

●工木バの僕

「人もし頭かしらたらんと思わば、凡すべての人の後しりえとなり、凡すべての人の役者えきしゃとなるべし」と。

「しんがりとなれ、僕しもべとなれ」

ということです。旧約聖書のイザヤ書42章から53章にわたつて出てくるところの、あの「エホバの僕」の歌。このキリストが本当に僕として、僕中の僕であつた。「僕」は神の聖なる意志を体現するところの者。その使命的存在です。

神の意志を——己の意志ではない、己の意ではない、己の思はない——

「あなたの意志を、あなたの御意みこころをどうかなしてください。どうかこの私をお使いください」

と。キリストの

「御意をなさせ給ええ」

は、

「この我を通して」

と言つて、提身している祈りですから、一番激しい祈りです。傍観している祈りではない。身を提して、

「どうか、あなたの御意をなしてください。このしようがない者ですが、この私をお使いください」

と。

「キリストはそれが出来たろうが、我々はとても遠いから」

なんて、福音の世界は、たかをくくることはひとつもない。イエス・キリストの不可能な命令をどしどし受けとつていく。神に在つては可能である。キリストに在つては可能である。その可能の世界を、可能ならしめる世界を開いているのが福音というので、生まれつき



の私たちができるなら、それは福音ではない。できないことをさせるというのが福音です。

●クリスチャンの自由

そういうわけで、私たちがこのキリストの中に自分を投げれば、キリストの僕とされる。即ち、パウロも己の義を塵芥ちりあくたの如く思つて、自分を

「イエス・キリストの僕」

と言いました。

「キリストは十字架の死に至るまで従い給えり」という。

マルチン・ルターが、あの有名な宗教改革の三つの論文の一つの『クリスチャンの自由』の中で、劈頭に、

「キリスト者はすべてのものの僕である。一切のものに仕える。

また、キリスト者はすべてのものに對して自主である。」

という、この二つの矛盾した命題を出しました。

神・キリストに依存して、何ものにも依存しないということにおいて、「自主」なんです。神・キリストに依存しているということで、神の聖旨を為すということで、「僕」である。僕であるということは、神さまの御意を為すことの故に、一切のものに對して仕えていく。仕えるのは屈従ではない。

本当に仕えるのは自由なんです。神さまから頂いたその絶対関係ですから、これは自由なんです。神に僕であるということが、何ものにも依存しないということが、自由なんです。絶対者においてただ縛られているということは、本当の自由である。

こういう自由というものを今の日本人は知らないわけです。「民主主義」なんて言つたって、それは勝手な自分がふくれあがつたような自由です。

この自由の中には、一体何が入ってくるか。神の生命、力、愛というものが入ってくる。自由は即ち、愛ということ。「仕える」ということは自発的な愛の動きですから。自発的な愛の動きであつて、仕方がないから仕えるなんていうのは「仕える」ではない。相手を喜ばし、救い、力を与えていくという、仕えることそのことが何という喜びだろうという仕えです。人を幸いにして、人を喜ばし、人を活かしていくんですから。そういう底力があるんです、この「僕」というのは。もう、イエス・キリストを見れば、はつきりわかる。だから、

「自主である」

ということ

「僕である」

ということは決して矛盾していない。主の僕であるときに本当に自主である。そういつた僕であるときに——神さまの本願は一切を救済しようというのですから、神さまの救済の



本願を受けた存在は人を救い上げていくところの神さまの器ですから——これほど、名誉ある栄光ある仕事はないわけです。人生を本当に積極的にしていく。

自分が上に立とうとか、誰よりも大きいとか、何とかいう、そういういつた名誉心や権勢欲というものは、特に男性が多い。大体、30歳を越えると、そういう衝動が強くなってくる。それは警戒しなくてはいかん。

●別な途

ダンテが、太陽が光っている理想の山に登ろうと思つた。その途みちを三つの動物がさえぎつた。豹と狼と獅子です。地上の肉欲的なものが「豹」です。貪婪、いろんな欲が働きますが、これが「狼」。それから、「獅子」は傲慢の象徴です。この傲慢、高慢というやつがサタンの靈ですから。この三つの動物に遮られて、自分はどうにもならんと。この動物をやつつけて、この途を通つた人はキリストの他に一人もいない。

「義人なし、一人だなし」

というのは、そのことです。もう悲嘆にくれて、途方にくれていたら、バージル（ヴィルギリウス）が現れてきた。

「お前は別な途を通つて行け」

と。別な途即ち、地獄を通つていく。地獄、煉獄を通つて、それから天国に行くんだと。地獄にたくさんの罪びとを——たくさんの罪の配列がある——そこに実に数学的な厳密さをもつて彼は描いています。徹底的にダンテは自分の姿を、罪の認識をさせられるわけです。そして、下へ行くほど、罪の種類は意志的になつていく。上の方は情的な罪ですが、下へ行くほど意志的な罪です。即ち、傲慢は意志的に神さまに反逆する。サタンがそうですから、サタンはどん底にいるわけです。

「汝の御意」

ではなくて、

「我が意こころ、我が意志」

というやつ。だから、キリストのあの祈りは、人間の一番危ない「我が思い、我が意志」というサタン的角度に対する否定です。靈的、傲慢というのが最大の罪です。人間は、いわゆる靈的になりますと、人を見下したり、

「俺の方が信仰の次元が高い」

というような高慢になる。とんでもない話です。それはすぐサタンに切り替わってしまう。

●無者中の無者

イエス・キリストは、サタンと戦うときに、神の靈を私なきらない。どこまでも、神の靈を神の靈として、自分をその中に本当に浸して、神の栄光と神の靈において勝ち給うた



のであって、彼自身が

「俺は靈的に、聖靈が充滿しているから、サタンをやつづける」

なんて、そんな氣持は一つもない。紙一重で大違ひになる。

イエスが断食して非常に飢えたときに、サタンは

「奇蹟をもつて、石をパンにしろ」

と誘つてきた。また、

「お前は神の子なら、山の上から、塔の頂きから落ちてみろ。旧約聖書に書いてある通りに、天使がお前を支えるであろう」

と誘つたときに、

「主たる汝の神を試むべからず」

と言われた。神の御意は、のっぴきならない墜落の時に助け給うということはあります。いつかちょっと或る人の例をお話しましたね。崖から落ちたその瞬間に

「主さま！」

と叫んでより頼んだら、その人は怪我をしなかつたという。もちろん落ちようとして落ちたのではない。その瞬間にそれだけの魂の叫びが出る人は本当に普段から祈り心の人です。最後に全世界の榮華を見せて、

「私におじきするなら、この世界をお前にやる」とサタンが言つた。

「主たる汝の神にのみ仕えるべし」と、キリストはどこまでも本当に神を立てている。

善の善なるひとが、「善き先生」と言われたら、

「なぜ、私のことを善いと言うか。神さまの他に善きものはない」

と、すぐ後にマルコ伝10章に出てきます。本当に私心のないということ。無私心、無私です。「無」というのは虚無ではありません。私ごころのないという無。これが「無者」です。イエス・キリストは無者中の本当の無者だ。だから、

「我を見し者は父を見しなり

という、全然反対のことが仰れる。神を見ようと思つたら、福音書のキリストに来るよりか仕方がない。イザヤ書のあの「エホバの僕」の四つか五つの歌に書かれているように、イエス・キリストはそれを本当になされた。

そういう角度が即ち、本当に僕、謙り、心の碎けたる者です。神に立ち返るとは碎けの心です。これはルカ伝15章の放蕩息子の譬話がその通り。自由独立して、自分は遠国に行つて、

「俺は自由独立だ」

と、大いに弟はいい気になつていた。自我が立つた生活をしていたものだから、ついにつてんてになつてしまつた。そして、我に返つて、



「悪かった」

と。碎けた心です。片一方は、兄さんの方は

「俺は品行方正である」

と、正しく父と一緒にやっていた。

「あの弟のやつは、あんな悪いことをして帰ってきたのに、お父さんが迎えるのは
けしからん」

と。これは自己義認という、パリサイというやつ。兄さんの方はパリサイだ。近くにいた
けれども、本当に近いのではない。弟と同じように、別な意味において父と遠いんです。

フレデリック大王がなぜ、「大王」と言われるか。

「自分はこの国家の第一の僕である」

と、彼は本当にその自覚のもとに、直訴も受けているような政治をしました。本当に民衆
の友である王者である。だから、「フレデリック大王」と言われた。

「ローマ法王は本当に教会の第一の僕としての自覚をもつべきである」というようなことを、どこかでルターが言つてたと思いますが。

● 翻りて幼児の如く

「人もし頭たらんと思わば、凡ての人のしんがりとなれ」

と。どうぞ、皆さん、先へどしどし行つてください。私はしんがりから参ります。また、
本当に役者となる。^{えきしゃ}キリストはそのことを具体的に示そうと思つて、

³⁶ 斯てイエス幼児をとりて、彼らの中におき、之を抱きて言い給う、³⁷『おお
よそ我が名のために斯る幼児の一人を受くる者は、我を受くるなり。我を受
くる者は、我を受くるにあらず、我を遣しし者を受くるなり』

と。どこまでも、父の栄光を求めておられるキリストです。マルコ伝10章15節の方に、
「誠に汝らに告ぐ、凡そ幼児の如くに神の国をうくる者ならずば、之に入るこ
と能わず』」^{あた}（マルコ10・15）

とある。ダンテも地獄を遍歴するときに、謙遜の象徴である
「麻の縄を帶した」

ということが書いてあります。

幼児は、本当に母に依存しているところの、自分を全托しているところの、そしてまた、
非常に単純な、疑いを知らない魂である。そういう幼児の如く、翻りて幼児の如くならなければ、ということです。

● 十字架の棄身

私たちの生活の体験から言いましても、自分を何ものかと思つたり、人を見下すような



気持になつたら、それは福音的でない。魂がもう展開しない。そのことに気がついたら、すぐキリストの前に本当に平伏さなくてはいかん。何といつても、そのことの大事な土台はイエス・キリストの十字架なんです。どんなに心が碎けましても、どんなに平伏しましても、この十字架の棄身、己を棄てたキリストの十字架には到底及ばない。このダメな私たち自身を、本当に十字架によつて、謙遜の謙遜、碎けの碎け、従順の従順に、キリストが恵みとして、私たちの魂の根底の事態として、呼んでいてくださる。その意味において、十字架を仰ぐということは、ただ「贖罪」というひとつ、何と言いますかね、神学的な或は教理的な命題を信じるのでは絶対にありません。

何も「十字架」という言葉をそんなに発することは要らん。無教会も

「十字架、十字架。内村鑑三先生の信仰は十字架中心である」

と言う。もちろん、事実そうですけれども。先生があのよう偉大な福音の展開をしてくださつたのも、この一点が土台となつていたに相違ない。しかし、十字架は、私たちがパウロと同じく——同質にですよ、水を割つたらいかん——パウロと同質に、

「我はキリストと共に十字架されたり」

ということです。

「どうも、しかし、まだ私は十字架されていないようです」

ではないですよ。人間の現実、人間の我というものは、それ事態が十字架されたような事態にはいきはしません。しかし、魂の奥で本当にキリストの十字架を受けとつて、「十字架されたり」というこの恩寵の現実を——恵みの現実ですよ——恵みの現実を本当に受けとつたならば、必ずその後から、

「我を受けよ」

と、この聖霊のキリストが臨んでくださいます。

靈の事態は、いろいろな場合があります。十字架をそれほど自覚しなくとも、聖霊に満たされることもあります。ありますけれども、十字架のその無私、本当の無者というところに、その恩寵を受けとつてているという——そこにとにかく根源的に常に立ち帰らなくては——そこをもつていらないならば、その靈性と言いますか、「靈的」ということは、私は信用しない。どんなに素晴らしい靈的なカリスマ的なことをいたしました——キリストの恐ろしい言葉がある——

「『私たちはあなたの名によつて悪鬼を追い出し、どうのこうのした』と言うけれども、私はお前たちを絶えて知らない」

とキリストは言われる。マタイ伝17章の終りの方に出ています。

他の宗教だつて、靈的な力はいろいろ働きますから。この集会に來ていた或る方が、

「あれでは他の宗教と変わりないじやないか」
というようなことで、出ていつたのがあるそだ。何を聞いていたか。私がこれほど十字



架の事態を語っているのに、何を聞いているか。まことにお気の毒なことです。私はその人に、

「どんでもないことだ」

といつて、手紙を書いたけれども、もうそれつきりです。

● 十字架と聖靈

宗教の世界はいろいろ現象面で類似なものがあります。けれども、質的に、イエス・キリストの贖い、罪の贖罪ということを、十字架の贖罪ということを根底にしていないならば、それはダメです。また、贖罪が本当に根底に受けとられているならば、必ず本当の意味において聖靈の世界に入れる。その点で、この聖靈の事態は、各人においてその人の生まれつきの性格や或いは才能やそれぞれに応じて、聖靈は自由に働き給うのであって、

「こういうような働きをしなければ聖靈でない。こういうのが本当の聖靈の働きである」

とか、そんなことはひとつもない。パウロのこの福音の構造がそのことを私たちに語っています。

「みたま聖靈は一つであるが、たまもの賜物はさまざまである」

という。政治をなさる方は政治でも、医学をなさる方は医学でも、芸術の世界は芸術の世界でも。またお役所であろうと、学校であろうと、台所であろうと、どこであろうと。針仕事であろうと、何であろうと。そこにおいて神の栄光が、聖靈の知恵と力と生命と愛とが働くわけです。それは本当に

「ああ、なんと楽しいことだろう」

ということになる。また本当に人を、その人が行き詰まつていれば、

「何とかしてそれを打開させてあげよう」

と。病んでいる人があるなら、

「何とかしてそれを助けて上げよう」

と。何でもいいです。自由に働いてください。それが具体的に本当に現れてこないならば、「それは十字架を本当に受けとっていると言えるでしょうか」と、そのことは言えると思います。

キリストが僕となられて、かく神の御意を本当に受けとつたときに、僕となつて御意を受けとるところには本当の力がある。観念で言っているのではないですからね。イエス・キリストが神の御意を受けとつて、言葉を発する時に、

「わが言は靈なり生命なり」

と言われた。

「この言を受けてござらん。直ちにお前の中にその生命がくるぞ」



というのが、キリストの生命ある福音の言葉であり、またキリストの生命ある業である。

「分からならぬ、この業を見て信じろ」

とまで、キリストは言われた。それは、業を理由としていらっしゃるのではなくて、

「業の奥の世界がこうなんだぞということを知つてくれ」

ということです。

「根源の現実を知れ」

ということ。そういう意味において、私たちが本当に僕とならなければ、神の栄光は現れないということをはつきりと自覚しなければならない。膨れ上がつていたらダメです。そのときは大いに人を支配しているような顔をしているけれども、どっこいそれは福音の世界ではない。

●フレンドシップ

おさなな
幼児の如くということです。

「幼児は、天使が見ている、守っている」

とマタイ伝18章にもあるとおりです。小さいひとを育てる今の幼稚園や小学校の先生方がそこを本当に自覚していただきたい。私は小学校の先生方に、日本中を歩いて、福音をお話したいと思う。迎えてくださるなら、いつでもどこへでも行つて、お話ししたいと思いますよ。小さいひとの魂を神のものとして尊重してもらいたい。ということは、甘やかすことではない。この頃の尊重の仕方は違うんだ。それだからみんな、何か傲慢な妙な子どもができてしまう。

³⁷『おおよそ我が名のために斯る幼児の一人を受くる者は、我を受くるなり。

という。幼児に限りません。どういう方をも本当に一人を受くる者は、

我を受くる者は、我を受くるにあらず、我を遣し者を受くるなり』

と。私たちは一人ひとりのお互いの間において、キリストの姿がその後ろにあるということです。これをもつているときに、本当の人間尊重ができる。一人びとがそこにおいてキリストの栄光の現れる方である。一人びとが天下一品である。

「あなたから、どうか、このキリストの栄光が現れてください」と。これが本当の尊重です。「コイノニア」といいましても、社交的にたどおもしろおかしくしているのが「コイノニア」ではない。「コイノニア」というのは、本当にお互いが有機体的な神の栄光体であるということにおいて、喜び喜んでお互いをのばしていく。本当の友情というものはそういうものです。

「フレンドシップ」（友情）

という言葉が昔、随分ありましたけれども。しかし、あの時もまだ、本当の「フレンドシップ」はまだ分かつていなかつたのでしょう。今はもう、「フレンドシップ」なんていう言



葉はなくなつてしまつてゐるくらいに、他を押し退けて何とか自分がよくなろうと思つて、あさましい世の中です。

あれはロンドンのケンブリッジの学生だつたかな。一番、二番を争うような秀才が、片一方が病氣した。その時に、自分のノートを全部貸してやる。そういうのが本当にやつぱり、イギリスはイギリス人らしい「フレンドシップ」が現れている。私も高等学校の卒業のときにやはりインフルエンザに罹つてしまつて、さあ卒業の一週間前、ノートはみんなブランクだらけ。そうしたら、或る友達が私に全部貸してくれました。私はその友情を今も忘れることができます。

これは本当に、お互いを、その人の神の栄光が現れるようにと念ずる僕の姿です。
しもべ

●御靈の權威

皆さん、福音という世界は何と不思議な、豊かな、楽しい世界でしょうか。ひとりの人
が本当に福音の世界に入つて喜ぶことを見るほどうれしいことはない。これが一番根源の
現象ですから。魂にキリストの愛、生命、光というものが燃えたら、十字架を通して来て
燃えたら、この火は、十字架を本当に受けとつている限り、決して消えません。また変質
しない。十字架をぬきにしたら、この靈的な力は変質しますよ、変なものに。けれども、
十字架が本当に受けとられているならば、自分は傲慢だろうかどうであろうか、といふよ
うなことを意識して心配することがなくなつてくるわけです。自然に碎けの姿になつてく
るわけです。そして、その本当の謙虚なところにまた、おかすべからざるところの權威が、
御靈の權威みたまというものがある。現実の我というものと、御靈の權威というものをごつちや
にしたら、とんだことになる。

どうか、そういうことで、こんな弟子たちの質問はそもそも大間違いであることが、もう
うキリストははつきりと示しなかつた。

ダンテが天国篇でいろいろ歌つていますけれども。もし、私が詩人であつたならば、ま
たダンテの天国とはだいぶ別な天国が書けやしないかと思います。しかし、ダンテといふ
人は彼自身がなかなか高慢ちきなところがあつたとみえて、煉獄を通るときも、重い荷物
を背負つてかがめさせられるところの傲慢の群がある。石を背負つて屈めさせられる。そ
ういうところをじつとダンテは見てたようですが。しかし、ダンテの世界ではまだ、ダン
テのこの『神曲』では、それは福音的ではありますけれども、徹底的にこの十字架の事態
においては——何といつても、カトリックの世界ですからね——私たちが望むように強調
はされておりません。けれども、本当に謙虚ということが、キリストのこの謙虚というこ
とが、どれほど必要であるかということには、もちろん気がついてはおります。



● 神の民

「おおよそ我が名のゆえに斯る幼児の一人を受くる者は、我を受くるなり。父を受くるなり」

という。要するに、

「山川草木悉く仮性あり^{ふっしょう}」

というけれども、いかなる事態におきましても、私たちはキリストの栄光をそこにおいて——底においてですよ。「そこ」というのはその存在の「底」に、「そこ」という場所であると同時に、その「そこ」は「底」なんですが——そこにおいて見て、それを何とかして栄光の現象にしようという、祈り心と力をもつて進んで行く。こういったことが本当の意味において福音であり、もはや

「天国において誰が大きいの小さいの。地上においても、誰がどうのこうの」という、人間の品定めなんて下らないことはなくなる。

いわゆる「先生中心主義」みたいなものはどこかへいつてしまふ。我々も、社会構成でいろいろな地位はあります。地位があるという事と、神さまの前に本当にそれぞれがのつぴきならない事ということは別問題です。

むしろ、人に現れないところの何でもない、いわゆる人間の歴史にのつかつてこないよう、そういった人たちが実は神の歴史を担つていて。神さまの天界の鏡には、神さまの巻物に書かれているところの歴史というものは、人間の書いたどんな歴史とも違う。神だけが知り給うところの歴史というものがある。その神の歴史を本当に歩んで行くところの「神の民」ということです。私たちが神の民に属せんとならば、僕ということが本当にその人の存在の本質となつていなかつたら、神の民になれない。キリスト者とはキリストの僕ということ。神の民はただこの僕の自覚を本当にもつて、僕の——女の方は婢はしためでもいいけれども——とにかく、そういった在り方がその人の魂の本当のどん底の姿でないものは神の民になれない。神の民は僕どもの民である。私ははつきりそう言わなければならぬ。

人間をもしごとに分けるならば、

「砕けたる心の人であるか、そうでないか」

この二つに分ける。その「砕けたる心」というのは、キリストにおける砕けを本当にいただいているところのもの。これが天国の民です。天国の民は、高慢な者は一人もはいれない。ということは、キリストの十字架が僕中の僕の姿ですから。キリスト教を知らない人もたくさんある。他の宗教の人もある。けれども、どの世界でも、神さまはその中でその僕的な魂を天国にピックアップなさると思う。

そういうことで、なるほど、パウロが自分を

「キリストの僕」

と言つて、とにかく彼は自分を嫌つて、自分を乗り越えながら進んで行つた。その意味も



よく分かるわけです。かくして、私たちは僕ということにおいて、実は本当の豊かな神の、存在と使命が全く一つになつてゐるところの事態を受けとつていく。それでこそ、どん底に立つてこそ受けとれる。また、キリストの生命をいただけば、どん底に立たざるを得ないんです。

●使徒的な質の信仰

いろんな人に私は誤解されたりする。自分も悪いんでしょう。私は本当にどう思われてもいい。どうか、無教会の方々が——それぞれみな大事な使命をもつています、また大事な才能があつて、みな立派な方々です——「無教会主義」になんかこだわらないで、「信」とか何とかにもこだわらずに、

「ただ福音だけだ」

と言つて、この使徒的な質の信仰の世界の中に——「十字架」というならば、十字架の後からくる聖靈の世界に——パウロがかくも言つてゐる「聖靈」の世界にどうか入つて、

「そうだ、本当にそうだ」

ということを叫んでいただきたいと思う。私はたくさんの無教会の友人、先輩を知つております。私の悲願がいつかきかれるときが来ると思つて進んで行きます。

どうか、皆さんも——無教会も教会も、プロテスチントもカトリックも、神さまの前に何もありませんよ——人間を、本当の僕的な人間という、キリストの神の栄光体としての人間というものを見ていく。

また、仏教徒であろうと何であろうと、本当に人間を愛することは、この聖靈の世界に来てこそできるんです。もう何のへだてもない。何という不思議な胸であろうかと。胸襟を開くというが、本当の胸襟を開く人は、このような聖靈の人でなければ開けない。本当の担いというのは、このような僕たるキリストをいただいているその中に生きて、その中に呼吸をしていなければ、僕とはいえない。

一昨日、信州のS君が肺炎で亡くなりました。M子さんから電話で言つてきました。S君は本当に惜しいひとです。彼は本当に聖靈の器でした。本当にいつも謙虚ということをむねとして歩いていました。今、信州で大事なひとなんですかけれども、なぜ、S君は逝ってしまったろうか。惜しみて余りありと、私は電報をうちました。しかし、内村鑑三先生が、「こんな国には愛想をつかした、そう言つてくれ」と仰つたが、S君は地上で伝道するよりも今仆れて、そしてこのS君の死を通して、めざめる人がもし出てくるならばと——また、出てくると思いますが——神さまは非常手段をとりなさつた。僕を取り上げなさつたと思うよりか仕方がない。どうか、しかし、まことの天国はそのようにして築かれていくということを身をもつて学びたいと思います。おわります。

